

新田次郎原作『劔岳〈点の記〉』

映画撮影現場からの報告 追っかけ情報

本号では、撮影現場からの情報をレポートします。

映画「劔岳 点の記」の撮影隊は、9月中旬から10月末まで、劔岳周辺でのロケを敢行し、本年撮影の予定分を完了したとのこと。

木村大作監督へのインタビューは、映画公開前に大々的に本誌に登場していただくとして、ここでは撮影現場で監督の奮闘ぶりのエピソードをお伝えします。

68歳という決して若くはない木村大作監督だが、2500m前後の高地である撮影現場を連日歩き回り、監督も撮影もというハードスケジュールでした。しかし、監督のこの映画にける志気はあくまで高く、撮影スタッフは監督の「なんとしてもいい映画を撮るんだ」という情熱についていくのに必死だったそうです。山に登るだけでたいへんな現場に、スタッフがヘタばっていると「柴崎測量官は、山に登るだけでなく登ってから測量をしたことを思い出せ、われわれも点の記にならなければならぬのだ」と叱咤ととんで来たそうです。

監督は、朝の4時頃から山小屋に貼ってもらっているポスターの前で出発する登山客を見送り、尋ねられれば映画の説明をし、撮影隊が隊列を組んで撮影現場に行く途中出会った登山客らにも、立ち止まって懇切丁寧に映画の説明



カメラテストに臨む。左から香川照之、浅野忠信、仲村トオル、小市慢太郎（劔沢にて）

をするのが常だったそうです。監督は「オレは今日150人に映画の話しをした。こうした草の根からの説明と、映画を見てみたいという人たちの獲得が必要なんだ」と語り、スタッフはハッパを掛けられているそうです。登山者は新田次郎氏の山岳小説は読んだことのある人が多く、「ゼッタイ見に行きます」と握手を求められることも十人や二十人ではなかったとのこと。中には、お疲れ様ですとコーヒーを分けてくれる人もいましたとスタッフの感激の声もありました。

この映画に出演する錚々たる役者さんは、木村監督が第一志望に考えていた役者さんが揃ったということです。富山市での製作報告会で木村監督は「これまで『八甲田山』を製作したときが肉体的、精神的に非常にきつかったが、

それと比較して今回が十倍しんどい。しかし人間には無理をして乗り越えなければならない時もある。この映画は、撮影しながら人間としての〈苦行〉をしており、映画人生をかけた作品を作り上げたい」語っておられた。

映画の世界が長く、名カメラマンとして数々の名作をものにしていくことで知られる木村監督のこの映画に賭ける迫力に、出演者、スタッフは「みな気持ちがひとつになっていく」と語られていました。真正面から「測量の世界」に取り組む監督の奮闘に、われわれ測量・地図にたずさわるものとしても、精一杯の支援をしたいという気持ちになりました。

(取材 浦郷武夫)



雪渓を撮影地に向かう一行